

第30回からいもフェスティバルinおおづ

熊本県大津町地域おこしグループ
「明日の観光大津を創る会」総務委員

にしむら かずまさ
西村 和正

はじめに

熊本県一の生産量を誇る大津町特産のからいも（甘藷）をPRするため、平成30年11月11日（日）に、「第30回からいもフェスティバルinおおづ」～大津からいも祭～（主催：からいもフェスティバル実行委員会、事務局：明日の観光大津を創る会＝「明日観」）が、秋晴れのもと、本田技研工業(株)熊本製作所のグラウンド等と隣接する南側の農地に於いて、町内外から約2万8,000人を迎え盛大に開催された。

今年のキャッチフレーズは“「掘って知って たのしんで」～がんばろう!! おお

づ～”である。その意味は、イベントのシンボルである「からいも」（甘藷）を活かして、来場者がお腹も、気持ちも満足する。また、町民（34,706人）や地域の団体（農業・商工等）が一体となって、自らの力で活力ある個性的な地域づくりを目的とするものである。

開会式

午前10時爆竹の合図で開会式が始まった。日本一「大津太鼓」の一人打ち、大太鼓の音が会場を盛り上げ、続いて、実行委員長（家入町長）による主催者挨拶と、社会人野球からプロ野球（オリックス）にドラフト指名されたHonda熊本の硬式野球部の荒西祐大投手に、大津町のマスコットキャラクター「からいもくん」から激励の花束が贈られた。



熊本県大津町位置図



会場に設けられたステージ

その後、30周年ということもあり、友情出店の「沖縄県嘉手納町」（日本初の甘藷伝来地）や、「滋賀県大津市」（災害協定締結市）もステージで紹介された。また、熊本県のゆるキャラ「くまモン」も応援出場、その他、地元のボランティア出演者の歌や音楽、ダンスなど様々な催しが行われた。

からいも堀り大会

からいもフェスティバルの目玉の一つでもある「からいも堀り大会」（約1 ha）には、からいもオーナーや当日堀り受付合せて約4千人が参加した。気象条件が良く例年より大きく育ったからいもをスコップや手袋を使って夢中に堀り出し袋いっぱい詰め込んでいた。からいもオーナー堀りは1口（30株）3千円の事前予約制（本年は335組452口）、また当日堀り者のために1区画（10株）千円で、約1,200区画が用意された。なお、からいもの栽培管理はJA甘藷部会に委託している。

その他のイベント

イベントとしては、ステージやからいも堀りの他に、フードコーナー、展示・啓発

コーナー、からいも館、Honda製品展示・子どもミニバイク教室・Honda Woods巣箱作り体験、フリーマーケット、防災プラザ、子ども相撲大会（主催：第11代横綱不知火右衛門顕彰の会）など盛りだくさんである。

ここで各コーナーを紹介する。フードコーナーの出店では、熊本県畜産農業協同組合中央支所の「熊本あか牛・豚肉のサイコロステーキ」、JA菊池の「焼き芋・酪農LL製品・新鮮野菜・果物・いも天ぷら他」、大津町食生活改善推進協議会の「からいも汁」、大津町商工会イベント出店組合の「いも天ぷら・いきなり団子・からいも団子・フライドポテト他」、肥後大津ロータリークラブの「牛串・カレー」、熊本大津ライオンズクラブの「焼きそば」、肥後大津陸会の「たこ焼き」、JA菊池がブランド栗としてPR中の「ぼろたん」の試食販売、肥後おおづ観光協会の「いきなり団子・牛タン鉄板焼き・天ぷら他」、大津町役場青年部「焼き芋」、「明日観」の「射的」が行われた。また、交流ブースでは、福岡県田川市（支援活動隊TEAM91）の「田川ホルモン鍋」、滋賀県大津市の「湖鮎の佃煮・



4千人が参加したからいも堀り大会



絵手紙コンテスト作品展示

ミニパラシュート作り体験」、沖縄県嘉手納町「いもづるの会展示他」が行われた。

展示・啓発コーナーでは、グリーンコープの「牛乳などの試飲」、大津町社会福祉協議会の「共同募金・輪投げ・車椅子貸し出し」、菊池森林組合の「木製品展示販売」、菊池法人会女性部の「クイズ・ソフトドリンク」、大津町資源保全活動組織連絡協議会の「パネル展示」、熊本建築士会東支部の「建築相談・子ども木工教室・じゃんけん大会」、熊本行政評価事務所の「行政相談委員利用パンフレット配布」が行われた。

からいも館では、「からいも百珍試食」(沖縄の川砂糖と南蛮菓子ハルテ)・「絵手紙コンテスト作品展示」(大津管内小学校・支援学校・一般応募)・「カライモものしりコーナー」(歴史、植付収穫貯蔵パネル展示・品種展示・相談)・「似顔絵コーナー」(大津高校)・「梅の造花展示・体験」(肥後大津民芸造花保存会)・「からいものつるを用いたリース作り体験」(大津町役場職員組合女性部)・「からいもスイーツ販売」(バニラビーンズ、2代目イモセガレブラザーズ、道の駅大津熊本菓房、むすび屋えん)が行われた。

からいもシアター

からいもシアター(大津からいも物語15分上映連続)の目的は、「からいも」についての歴史伝来や植え付けから収穫保管の流れやからいもの品種の用途別紹介、生産量などの統計資料、からいも文芸(絵手紙コーナー)などに興味をもってもらうこと、また、フェスティバル時以外は図書館での常設展示や小学校における授業等でも活用できるようにすることである。上映内容は、「からいも」(サツマイモ)が日本本土へは当初は献上品として扱われ、江戸中期の飢饉の救荒作物として普及したこと、また大津町は阿蘇山の火山灰による『からいも』の適地で畑作地帯の主要な作物であったこと、戦中戦後は、国策のアルコール工場誘致をしてその原料供給地であったこと、昭和30年代からは、青果用として貯蔵庫も独自に開発し、周年作物として安定的に市場へ出荷され、現在熊本県一の生産地大津の「からいも」として認知されているというもの。上映には作付け、収穫、貯蔵の様子と健康食品として認識や、またいもの料理方法や和洋食の紹介と生産農家、若手後継者である「2代目イモセガレブラ

ザーズ」などを紹介している。祭り後は町内の小学校の教材として活用している。

フェスティバルの今後

今年もたくさんの人たちが「からいもフェスティバル」に集い、今や「からいも」といえば「大津」として熊本県民には知れ渡っているのも30年も祭りを継続した成果であるといっても過言ではない。

「からいも」はJA以外でも購入することができるが、阿蘇方面へ向かう途中の国道57号線沿いの「道の駅大津」は、「からいも」の可能性を広げる新商品開発を続け、毎年10点以上の新作が誕生し、カスタードやクリームチーズ、「いきなり団子」などユニークな味をそろえた売り場を常設し、スイートポテトやクッキーなど「からいも」を使った土産物コーナーを設け、週末は焼き芋も販売する。

「からいもフェスティバル」の運営本部長は、歴代行政職でない者が務めている。現本部長の本田昌則氏は「明日観」のメンバーである。天気次第では祭りの開催もできないが、判断は本部長に委ねられているため、そのストレスは大変なものであろう。敬意を表するものである。

イベントの課題は、「からいもフェスティバル」の中心を担う「明日観」会員の高齢化とそれに伴う発想の硬直化である。大津町のからいもの生産量は熊本県内のトップであるが、30年前より3割ほど減っている。生産者の高齢化や後継者不足はイベント運

営にも影響する恐れがあると危惧している。30年の節目に当たり「明日観」会長坂本寛氏は「精一杯のおもてなしで、また来たいと思ってもらうことが大事。もう一度、イベントが始まった頃の熱気を取り戻したい」と会員の思いを伝える。

町はボランティア団体「明日観」へ「金はだすが口はださない」との姿勢を堅持している。このことが30年間もこの祭りを継続させている一因でもある。からいもフェスティバル実行委員会へ参加している団体は農業分野の関係者だけではない。様々な分野の団体やボランティアの方々に支えられている。からいもフェスティバルの30年間の積み重ねが、大津町や町民にとっても重要なイベントとして成長したのである。大津町の人口は、約40年前頃には1万8千人ほどで減少のピークであったが、本田技研工業(株)熊本製作所の誘致をきっかけに今や2倍近くの3万4千人となっている。

町内には沢山の工場団地のほか、新興住宅地や団地ができた。これに対応してボランティアグループの「明日観」は、在来の住民と新住民との接点の場として、春の「つつじ祭り」や秋の「からいもフェスティバル」を主催、また夏の「地蔵祭り」支援をし、「ふれあいの中のふるさとづくり」を目指してきた。この祭りを継続していく事は、現在、未来の住民を幸せにしていくと確信する。